

みたか環境ひろば 第67号

平成31年 4月12日号



環境講座「海洋プラスチックごみの実態と海洋生物への影響」を開催しました！

三鷹市、みたか環境活動推進会議主催の環境講座が3月30日の午後2時から、三鷹市市民協働センターで開催されました。50名を超える参加者と、共に学び考える場となりました。国立研究開発法人海洋研究開発機構（JAMSTEC）の土屋正史氏を講師に迎え、海洋プラスチックごみの多様なふるまいを学びました。

JAMSTECは「しんかい6500」等の潜水船で海洋生物の調査をしながら、海洋ごみの問題を提起し、「深海デブリデータベース」として公開しています。土屋氏は有孔虫など海洋微生物の研究者として著名な方ですが、マイクロプラスチック※がサンゴと褐虫藻の共生を阻害していることや、ウミガメがクラゲと間違えてビニールを誤食し、消化できないために餌を摂れなくなり衰弱することなど数々の具体例を紹介されました。他にも、食物連鎖によって大型生物（サメなど）が化学物質を体内に取り込んで、内臓（肝臓など）に濃縮され蓄積されていくことも知りました。化学物質は海に流せば、必ずしも希釈されるとは限らないことを改めて認識しました。



★ 「環境講座の様子」 ★

現在、7500万トンのプラスチックが海面に浮いていると考えられているそうですが、そのうちの約4割となる3000万トンが沿岸や浜辺にあり、4500万トンは外洋にあるとのこと。講座中のスライドでは、海流の渦の中心に多く見ることができ、数千メートルの深海底にレジ袋が見つかったりしていましたが、実際の観測によって推定できる量は44万トンとのこと。驚いたことに、外洋に漂うはずのプラスチック4500万トンのうち約99%はどこに行ったのか分からないのです。また、注意したいのは、マイクロプラスチックなどは様々な化学物質（DDTやPCB等）を吸着する傾向があるということです。

では私たちは何ができるのでしょうか。現在、私たちはプラスチックのない生活は考えられません。特に食品を衛生的に管理することや、医療の現場では、薬品に強く劣化しにくいプラスチックの特性は貴重です。交通関係でも軽くて丈夫な部材は、燃費の向上など経済面でも絶対に必要な素材です。これらの有用なところは否定できませんから、使ったあとの処理を工夫するしかありません。いろいろ考えられますが、結局大切なのは“4R”に尽きそうです。Refuse（不要なものは断わる）、Reduce（そもそもゴミになるものを減らす）、Reuse（再利用する）、Recycle（資源として再生利用する）です。講演では、さらに3つのRを付け加えたRethink（本当に必要なのか考え直す）、Repair（不具合が生じたら修理して使う）、Redesign（製品を見直す）の“7R”も紹介されました。土屋氏は多彩な映像を使い、ユーモアを交えながら丁寧な説明をされました。講演後も市民からの意見、質問が続き、充実した時間を過ごしました。（佐野）

※マイクロプラスチック：5mm以下の細かいプラスチック



もったいない話

節分の日、デパートの食品売り場の恵方巻の前は多くの客で込み合っていました。最近は、種類も多くハーフサイズ等、次々と奥から運ばれてきます。こんなに売れるのだと思うほどの量です。しかし、テレビによると、節分の日の本番がまだという午前中に、すでに産業廃棄物として工場に持ち込まれているとのことでした。そのあと、飼料となって出荷されるようです。なんとももったいない話です。

他にも、農作物も天候に左右され、大根なども大きくなりすぎても規格外で出荷されず、廃棄処分となるようで、もったいなく思います。農家の知人から、大量に野菜をいただくことがあって、すぐ茹でたり、干したり、冷凍したり、ピクルスにしたり、新鮮なうちに使いきる方法を考えています。それらを利用しての作り置きおかずはとても役立っています。

そして、この頃心がけていることとして、買い物では消費期限の短くなった割引されているものを買っています。これが食品ロスにならない1つの方法だと思っています。（山下）



私の「三鷹今昔記」

昭和20年代までの日本は、衣食住すべてに困窮し、辛くも戦争を生き延びた人々も一層厳しい生活を余儀なくされました。三鷹に3歳から75年間住んできた私も、子供ながらに家族や周囲の人達の必死な生き様を見てきた一人です。終戦間際には毎晩のようにアメリカのB29爆撃機の編隊が轟音を響かせて都心や、中島飛行機武蔵野製作所（現在の武蔵野中央公園近辺）に向かい、大量の爆弾を落とす音に怯えながら防空壕の中で震えていました。大昔のようですが僅か75年前の戦時中の話です。未だに爆音や東京大空襲時の真っ赤な空を思い出します。その頃の自宅の周囲は、広大な畑と雑木林や茶畑が連なるのどかな田舎町でした。夜には蝙蝠が飛び交い、狸が林から飛び出し、ムササビが木々の間を滑空し、夏には庭一面に蛍がイルミネーションの如き、幻想的な光景を見せてくれました。舗装された道路はごく僅かで、住宅地は雨が降れば長靴なしでは歩けません。まだ街灯も整備されておらず、夜は提灯をつけて歩いた場所もあります。

井の頭池を源流とする神田川は水量も多く格好の水遊び場であり、シジミの宝庫でした。戦後、井の頭池がプールとして開放された時期もありましたが、湧水はとても冷たく、長時間浸かっていられないほどでした。

昭和25年に三鷹市は独立市政を施行し、それを境に都営、公団などの集合住宅の誘致が進み急激に人口が増え、公共事業の推進も著しく、三鷹市は「市」の様相へと変化したように思います。それに伴い畑や雑木林が少なくなったのは、残念ですが致し方ないことでしょう。

昭和48年、市は全国初の公共下水道普及率100%と言う誇らしい実績を上げ、衛生面が飛躍的に向上しました。翌年には、これも全国初のコミュニティ・センター、住民協議会が誕生し市民活動の中心となっています。

平成に入り益々発展し、住民基本台帳によると、昭和2年（1927年）の三鷹市の人口は約6900人で、93年後の現在は187,000人を超えています。大きく成長した地域ですが、大都市東京の中で未だに緑の多い場所として上位にランクされ、住民に愛されていることは確かです。縄文の時代から集落が形成されたほどに住みよく歴史ある緑豊かな三鷹を、これからも大切に次世代へ繋ぎ続けていきたいと心から願っています。（矢成）



★昭和22年頃の三鷹市役所周辺の空撮写真
(出典)国土地理院ホームページ

「地域の資源を大切に」エコ農産物で食農教育」

三鷹市と若手農業者の集まり「JA東京むさし三鷹地区青壮年部」は地域資源堆肥化事業に取り組んでおります。この取り組みは、三鷹市にグラウンドを置く東京大学馬術部で排出される「馬糞」と、同じく同市にある国際基督教大学の「落葉」を同大学構内の堆肥所において攪拌する（混ぜ合わせる）ことで、良質な堆肥を作りだし、その堆肥によって生産された農産物を市内小学校の子ども達へ提供するという取り組みであります。



★エコ農産物を子どもたちへ★

昨年には市内全小学4年生にJA東京むさし三鷹地区青壮年部員が作った「エコ農産物」を提供しました。さらに、各小学校を代表しておおさわ学園三鷹市立羽沢小学校にて、子ども達にエコ農産物の説明や配布セレモニーを行いました。子ども達からは「馬糞や落葉から野菜や花が作られるなんて知らなかった！農家の人ってすごい！」という声もありました。

今後も農業の力で地域資源を有効活用し地産地消を目指し、そして子供達には資源の循環・環境への関心を高めてもらうとともに、三鷹市内に都市農業があることの素晴らしさを実感してもらうために、地域の皆様と一緒に取り組んでいきたいと思っております。（平塚）

編集後記

ようやく春の到来。三鷹中央防災公園にもロウバイが開花しました。梅・桜も開花し菜の花が待ち遠しいです。平成の年号も残り少なくなりました。平成は自然及び人災も含め、災害の多かった時代であったような気がします。災害に遭われた人々にはお悔やみ申し上げます。反面、近代日本において戦争への参加がなかった時代でもあります。新たな時代に災害が少なく環境にやさしい時代を望みます。（平澤）

次回の発行は令和元年6月の予定です。

発行：みたか環境活動推進会議
(愛称 みんなの環境)

連絡先：三鷹市生活環境部環境政策課
電話 0422-45-1151 内線2525

E-mail:kankyo@city.mitaka.tokyo.jp

本誌は、市役所、市政窓口、図書館、コミセンや市のHPから入手できます。